

再帰代名詞の指示照応問題に関する考察

井上 卓

1. はじめに

Lakoffを始めとする認知言語学者は、再帰代名詞 (refl.) の指示照応の問題を再三取り上げている。Lakoff(1996)は、If I were you, I'd hate me. と If I were you, I'd hate myself. という例文をよく引き合いに出して論じているが、これらの例文が本研究を始める動機の一つになった。例えば、前者の me と後者の myself の違いは、文の意味とどう関係するのか。再帰代名詞の再帰的用法は、言うまでもなく、主語の動作が自分自身に戻ってくるものだから、「私は自分自身を憎む」は、普通 I hate myself. で表す。だから、Lakoff の I'd hate me は、指示と照応がミスマッチした文(非文?)である。Lakoff の例文は、if 節を伴う複雑なものだが、実際に英文を読んだり聞いたりする時、同一指示なのに I looked me in the mirror. という指示照応のミスマッチ例に出会い疑問に思うことも多い。本研究では、refl. の再帰的用法に焦点を当てて、指示と照応に関する形式文法に当てはまらない例の収集に努めた。そして、これらの例を分類して、Lakoff 等の認知言語学的観点だけでなく、視点や意味論的な観点からも分析考察して、指示照応の問題点を深め解明しようとした。

2. 指示と照応

まず、照応とは、名詞(句)を代名詞が受けることをいい、照応形を anaphor という。普通は、前に出てきた名詞句、先行詞を、後ろに来る名詞句が代名詞の形で受けることが多いので、これを前方照応という。

- (1) *Mary* said that **she** was angry.
(McCawley 1988)

- (2) *John* pities **himself**. *ibid.*

(1)で、*she* はその先行詞 *Mary* を指していて前方照応をなしている。(2)では、*himself* が先行詞 *John*

に対して前方照応である。このように、文中で代名詞が名詞を指すことを指示 (reference) という。また *Mary* と *she*, *John* と *himself* は、それぞれ同じ人を指している、つまり同じ指示対象 (referent) を持っている。このとき、これら2つの名詞句は互いに同一指示的 (coreferential) であるという。つまり、再帰代名詞の再帰用法は、同一指示表現である。

3. 先行研究

3.1 Quirk et al. (1985 : 356) :

- (3) He saw { *himself* } in the mirror.
 { *him* }

(3)で、*himself* は、必然的に主語 *he* と同一指示で、*him* は、必然的に誰か他の人を指す。通常の目的格代名詞よりも再帰代名詞を用いる必要がある。

3.2 Huddleston & Pullum (2002 : 1484) :

- (4) *Ann*_i blames *herself*_i / **her*_i for the accident.
[mandatory]

(4)のように、もし先行詞が同じ非再帰形で置き換えられないなら、再帰形は強制的である。

3.3 Biber et al. (1999 : 342) :

再帰的用法では、再帰代名詞は同一節内で、通常主語の位置にある、先行する名詞句の指示対象との同一を示す。

- (5) [*I*]'m cooking for myself tonight. (CONV)

4. 再帰用法での指示照応のルールに当てはまらない例の収集と方法

3で述べた文法学者達は、いずれも形式を重視しており、2で述べた指示と照応の観点から、同一節内で同一指示の名詞句が2つあるとき、2番目の名詞句が1番目の名詞句と人称・数が一致して再帰代名詞化すると断定している。ところが、実際、再帰代名詞の再帰的用法に関して、指示照応の規則に当てはまらない例も多く見られる。こうした例を、

BNC, LKL (Larry King Livesのscript [2000年1月1日 - 2005年9月3日]), Googleから収集してきた。BNCとWordbanks, LKLについては, I * me; you * you; he * him; she * herを語句検索して, 「S + vt. + (simple) personal pronoun」の形の例を探した。(その結果, [I + vt. + me]の例が殆どで, 他の人称の例は殆ど見出せなかった)。LKLについては, コンコーダンス・ソフトのAnt Concを使用した。“I * me”で検索, 「S + vt. + (simple) personal pronoun」の形の例を探した。その結果, [I + vt. + me]の例が14。ここでも, 1人称の例が殆どで, 他の人称の例は殆ど見出せなかった。収集した例を次のように分類してみた:

(a) (主体の)入れ替わり[条件節をよく伴う]

(6) If I were a man I'd tell me to get lost - and fast! [BNC]

(7) “If I was her,” thought Gazzer bitterly, “I wouldn't believe me either.” [BNC]

(8) I know I wouldn't have believed me if I were you.” [WB]

(b) 話し手の視点 <相手や自己への嫌悪感・違和感等[文の主語でなく, 話し手の視点から]

(9) Just look at you, whining like a baby. Oh, you make me so sick. [BNC]

(10) Look at you, you're so tense. How can you possibly drive when you're all wound up that way [BNC]

[話し手が文の主語の視点から]

(11) “I wouldn't trust me, either. [BNC]

(12) Now I know why he whacked me, I would whack me too. [BNC: APL 1991]

(13) “Afraid of neighbors?”
“Of course not. I'm afraid of me...” [BNC]

(c) 話し手以外の視点

(14) In simple terms, the self is how I see me. [BNC]

(15) Consciousness I love me more, I love him less [BNC]

(16) King: Why did you get divorced?
MESSNER: There was so much hurt that had gone on in our marriage that I just felt I couldn't -- in order to forgive Jim I

had to get away from him. I -- and that's another human failure of mine. But I would have been -- and I told you so person -- I know me.

[LKL June 2001]

[臨死体験]

(17) I saw me rising from my bed and at the ceiling of the room looking down on my body.

[http://www.oberf.org/nde_like_stories.htm]

(18) When I saw me between the bed and the wall I saw the bed and the wall and me.

[http://www.nderf.org/marguerite_s_s_oss_nde.htm]

(d) 文脈との関連[語用論的]

(19) CARTER: ...And I really, really begin to act like I love me as he showed me.

[LKL Jan. 2000]

(20) King: Can you help you?

ALTEA: Oh, I do. I help me all the time. [LKL Mar. 2000]

(e) 利害の与格(Dative of Interest)

(21) just happened to go in one day for some meat and I got me bacon there for Christmas... [BNC]

(22) DARRYLL HAMMOND, ACTOR (as Vice President Dick Cheney): ...I got me a bionic ticker! This thing regulates my heartbeat... [LKL Jan.2002]

5. 認知言語学者の解釈

5.1 George Lakoff (1996):

(23) If I were you, I'd hate me.

(24) If I were you, I'd hate myself.

(25) I dreamt that I was Bridget Bardot and that I kissed me.

解決のヒント: このような反事実の文は2つの可能な世界(現実世界と仮想世界)の観点から理解する必要。

Lakoff (1990): 「指示の不一致」(Split reference)---客観主義の古典的体系では, 一つの世界にある「もの」が別の世界にある複数の「もの」に対応

することを許さないが、このような問題が自然にごく普通に扱える非客観主義的な意味論が存在。
=メンタルスペース理論

5.2 Fauconnier Gilles (1985) :

メンタルスペース理論

同一指示に関して : If I were you, I'd hate me.
: If I were you, I'd hate myself.

意味から、自己を2つの部分 [上で, Lakoff(1992) が Subject と Self に分ける] に分裂させる必要。

6. 分析と考察

4で、収集した文例を、5つのグループ : (a) (主体の) 入れ替わり, (b) 話し手の視点, (c) 話し手以外の視点, (d) 文脈との関連, (e) 利害の与格に分けてみた。グループ(a)は、主体と客体という認知言語学的観点に、グループ(b)(c)は、視点的観点に、グループ(e)は、意味論的観点に関するものである。ここでは、3つの観点 [認知的観点, 視点的観点, 意味論的観点] から、4での文例を考察していきたい。

第1に、認知的観点から見ると、グループ(a)の(6) - (8)は、条件節を伴い、主体が入れ替わっている。例えば、(6)で、If節で、現実には女であるIが、男であると仮定したため、主節のIは、主体が男と入れ替わった新しい人格とも言うべきもので、その主体が自分に「失せろ！」と命じている。Myselfでなくmeとなっているのは、主体から見ると、別の人に当たるからである。I'd tell meは、統語的には非文法的だが、(主体の) 入れ替わりという風に、自己を概念化すると、1で述べた指示照応の規則と矛盾しないことになる。このように、(6) - (8)は、上のLakoff, Fauconnierの挙げた(23)(24)と同種の文であり、Lakoff等は、現実世界と仮想世界という2つの世界の観点を応用して、同一指示のもとでの指示照応の不一致という問題を解決できている。

ここで、Lakoff(1996)が再帰代名詞を認知的に説明するのによく用いる例文(23)(24)について、人称の観点から考えてみたい。つまり、これらの例文は、すべて1人称と2人称に関しているが、これらは特殊なケース [話し手と話し相手の関係が自明で、自動的にI-meが決まってくる] ではないだろうか。筆者はGoogleで人称を変えて検索したが、その検

索結果から、Lakoff等の挙げた(23)If I were you, I'd hate me.は、実際によく使われていることが解った。対照的に、If I were you, I'd hate myself.は、使用がごく僅かである。このことから、「(主体の) 入れ替わり」的表現は、身近な表現であることがわかる。つまり、Lakoff(1996)によれば、従来の形式的な言語学では、1人称はすべて同じ人物を指すという指示照応観を取るため、If I were you, I would hate me/ myself.のような文の説明はできない。そこで、メタファー的に人のselfを主体と客体とに分けて概念化し、現実世界と仮想世界という観点に基づく認知的理論を応用して、これらの文の形式と意味のミスマッチを解決したわけである。

さらに、本研究で挙げた例文(6) - (20)で、指示照応の箇所が、大部分、1・2人称に関したものである。これは、他の人称での例が殆ど見つからなかったためだが、上で述べたように、話し手と話し相手の関係が自明な場合、統語形式を無視して、自動的にI-meが決まってくるのでは、と考えられる。特に、(19)(20)は文脈との関連が強い。つまり、これらの例は、統語的には容認できないが、意味論的な解釈のもと(語用論レベル)でのみ成立する文章だと言えよう。意味論的な観点については、後で触れたいと思う。

以上見てきたように、Lakoff(1996)の(23)(24)は、条件節を伴った複雑な例であり、また、実際の我々の周りには、FauconnierやLakoffの、現実世界と仮想世界という2つの世界の観点からの理解やメンタルスペース理論では解決出来ないと思われる例も沢山出てくる。例文(9)から(20)がそれに当たる。

(9)から(20)を概観すると、これらの例で、再帰形でなく人称代名詞が用いられるのは、主体が自己(客体)を客観視するあまり、自己を他人扱いした、そのため人称代名詞が使われたのでは、という印象を受ける。自己の客体化に関しては、廣瀬(1997)は、主体が自己から分離したときに自己の客体化が起こるといい、love oneself, hate oneself等のように、主体は客体化された自己に自由に働きかけることができる、と説明している。しかし、これは、再帰代名詞に関するものであり、(9)から(20)に現れる人称代名詞の説明に当てはまらない。こういう同一指示・再帰用法(?)の人称代名詞は、どう説明すればいいのだろうか。この点については、視点的・意味論的観点か

ら、後で述べたいと思う。

(9)–(13)は、自分を異質視(他人視)したかのような表現である。これは、自己嫌悪・望ましくない自分・いつもと違う自分といった気持ちから出たように思われるが、文の主体から見た客体への認識の違いから、と言う点で、清水(1995)の認知的(意味論的)な観点も面白い。清水によれば、物理的には「行為の主体=行為の対象」であっても、「行為の主体=行為の対象」ということを認識していない場合か、あるいはしたくない場合は、再帰代名詞ではなく、人称代名詞が用いられると説明している。清水は次の例を挙げている：

(26) (モニターテレビに偽のシャッターが映っていた際にシャッターが破られた。後で警備員が、自分だって自分の目が信じられないという意味で)

I wouldn't believe me either. Charlie's Angels 04/05/94

(26)は、(9)–(13)に、特に(11)と類似している。このように、再帰的用法で、文の主体から見た対象(客体)への認識の違いで、目的語に再帰形か人称代名詞の使い分けが出てくると考えられる。

第2に、視点的な観点から(9)–(18)を考えていきたい。視点とは、話し手が自分や他者をどう見るかという問題で、Kuno(1987)は、視点を映画監督のカメラアングルに例えている。文中の人物について、話し手がどの位置にカメラを置いて見るかによって、視点が変わり、表現も異なってくる。

廣瀬(2007)は、再帰代名詞の視点的用法の例として、(27)を挙げ、視点と再帰代名詞の関係を説明している：

(27) The adults in the picture are facing away from us, with the children placed behind {them/ themselves}. [Cantrall 1974]

(27)で、themを選ぶと、話し手の視点から見た解釈になり、themselvesを選ぶと、話し手は、状況の主体に客体的自己を投影する、つまり、themselvesの指示対象adultsの視点から見た表現になるのである。つまり、themの場合は、文の主体の動作対象へのempathy(共感)の度合いが低く、themselvesは、empathyの度合いが高いということになる。

例文(9)–(18)に戻って、視点的に、これらの例を、

「話し手の視点」<自己嫌悪・望ましくない自分・いつもと違う自分>の(9)–(13)のグループと、「話し手以外の視点」の(14)–(16)のグループに分けてみる。

まず、最初のグループで、「鏡で自分を見なさい」は、一般的にLook at yourself in the mirror.が普通である。そして、数は少ないが、単純代名詞を用いた(9)(10)のような言い方も見出される。このことは、Googleでの検索結果：Look at yourself in the mirror.が約122,000、Look at you in the mirror.が約28からもわかる。視点的な違いは何だろうか。(9)(10)を次の例と比較してみたい：

(28) Look at yourself in the mirror. You should be proud of your appearance — and that means a healthy appearance. [BNC]

(28)で、文の主語は、自分を望ましいものとして肯定的に見ている。話し手は、文の主語youを対象に選び、youの視点から自分を見ている。この場合、自分の容姿に誇りを持っているという假定だから、自分へのempathyの度合いは高いので、再帰形を取る。また、メタファー的に自己は主体の容器であると考えるLakoff(1997)に従えば、主体は、内側から自分(客体)を眺める(コントロールする)ことになる。一方、(9)(10)で、話し手の観点から、自己を否定的に距離を置いて見ている。例えば、(9)は、文の主語よりも話し手の観点から見ている。話し手の観点から、赤子のように泣いている嫌悪すべきyouを見ている。当然、youは他人視され人称代名詞の表現になる。(11)–(13)は、話し手が文の主語の場合だが、いずれも自己嫌悪等から自分を異質視した表現である。

次に、(4)–(16)のグループは、「話し手以外の視点」を持つものである。これは、自分を望ましくないものとして異質視するというよりも、客観的に話し手以外からの視点から自分を見る表現である。これには、(14)(15)のように、心理分析的な表現が多いようである。(16)は、KingとJim Bakkerの前妻Messnerとの対話から、テレビ福音伝道者だったJimがセックススキャンダルで逮捕され、2人は離婚した。離婚の理由を聞かれて、Messnerは、自分を客観視してI know me.と言っている。I know myself.と言えば、話し手が文の主体(I)の視点から自分に思い入れした表現で、自分の感情や意識と

の一体化 (empathy) が感じられる。I know me. の me については、視点的には、話し手ではなく、話し手以外の視点、People know me のように、世間一般の視点から見た自分ではないだろうか。以上述べたように、文によっては話し手以外の視点が現れると思われる。このことは、野島(1979)が、話し手が自分自身を話し手以外の観点からみた対象として把握するとき、代名詞化が可能である、と述べていることから窺える。Native speaker は、こうした視点の切り替えを直感的に行うのでは、と考えられる。

(17)(18)は、臨死体験的な表現である。「私は自分がベッドで横たわっているのを見た」は、I saw myself in the bed. が一般的に使われるようだが、(17)(18)のように、数は少ないが、単純代名詞を用いる場合もある。これは、ウェブ(Google)での検索結果：I saw myself in * bed. が約280、I saw me in * bed. が約20からも窺える。次は、myselfを用いた例である：

(29) After that, I saw myself lying in bed, perfectly still, trying to fall asleep ... I could see myself beginning to drop off ...
[<http://www.llewellyncyclopedia.com/article/232>]

(29)で、話し手は、視点的に文の主体(I)からの視点で自分を眺めている。自分の身体がベッドに触れている感触もあり、意図的に自分の意識とも一体感を持った表現である。一方、(17)も、話し手が自分の視点で述べているが、meの視点が別のもの、例えば、医者や看護師の患者に対する視点といったものである。従って、(29)と比較して、staticで客観的な描写になっている。

第3に、意味論的観点から、グループ(d)の(19)(20)を見てみたい。これらの例文は、グループ(b)(c)のように、自己客観視的表現に見えるが、文脈との関連、語用論的なものからきたと考えられる。(19)は、KingとCarterとの対話。Carterは殺人の罪で20年間収監された後、釈放された。彼は映画化された自分について聞かれて、as he showed meと対応してI love meと言っている。(20)は、Kingと霊能力者Alteaとの対話。AlteaがI help meと答えたのは、Kingが、人の将来を予言できると言うAlteaに、Can you help you?と聞いたのに対応。このように、(19)(20)で、-selfでなく人称代名詞が用いら

れるのは、文脈との関連、つまり語用論的な面から起こっている。

グループ(e)の(21)(22)は、利害の与格のmeの例である。利害の与格は、心性与格(Ethical Dative)とも呼ばれる。安藤(2005)によれば、著述の内容が与格の名詞句に利益または不利益になることを示す。二重目的語の与格と告示しているが、他動詞ばかりでなく自動詞と共起することができる…。利害の与格は、心理的影響が大きいと心性与格(ethical dative)とも呼ばれる。(22)は、LKLから、俳優のHammondが副大統領のチェイニーの物まねをして、I got meと言う。八木(1999)によれば、He cooked him an omelet.では、それぞれの代名詞が同一指示であるという解釈はできないが、I cooked me an omelet.のIとmeは同一指示であることは疑いの余地がないから、再帰代名詞にする必要がないということが考えられるという。

このように、利害の与格は、文中の出来事に対して、文の主体が関心とか共感を持つ態度を表し、形は文脈の影響を受ける。つまり、(21)(22)の利害の与格meは、(19)(20)の人称代名詞と同様に、統語的に受け入れられないが、意味論的な解釈のもとでは受け入れられる文章だということになる。

以上述べたように、4の例文(6)–(22)を、認知的・視点的・意味論的という3つの観点から考察してきた。この結果、再帰的用法に関して、再帰代名詞の指示照応問題は統語的問題だけでなく非統語的なもの、つまり、認知的、視点的あるいは意味的な問題でもあるということが明らかになってきた。

7. 問題点

第1の問題は、Lakoff等の理論でも説明のつかない例をどの程度解明できたか、ということである。Lakoff等の理論でも説明のつかないと思われる例文(9)–(22)について、視点的あるいは意味論的観点からの考察を試みたが、まだまだ不十分で、実証的研究には、例文数も不足している。

第2の問題点は、分析・考察を通して、再帰的用法での再帰代名詞の指示照応問題は、統語的問題だけではなく視点的あるいは意味的な問題であると考えられる、とまとめたが、まだ不十分で、これを更に実証する必要がある。

八木(1996)は、再帰形が生じるのは、統語的な

理由よりは、むしろ意味解釈上の問題である、と述べているが、第2の問題点は、このことに結びついてくる。八木は、He killed him. / He killed himself. の対立からしても、曖昧性を生じないために2つの形が存在するのである、と論じている。この点に関して、筆者が行った refl. の通時的研究でも、OE では主語と同一指示の時でも、普通人称代名詞が再帰的に用いられていたが、意味解釈の曖昧さを避けるために refl. が出現したとの説が有力である。これらのことから、再帰的用法での refl. の指示照応問題について、意味論的問題が大きく関わることが言えると思う。

8. おわりに

分析考察を通して感じたのは、予想した以上に、意味論的なものが文の形に影響を及ぼす可能性があるということである。なぜ認知言語学派がこの問題で生成文法といった形式文法を批判するのか、その理由として、同一指示・照応の問題が、統語的な問題だけでなく、意味の問題でもあることがわかってきた。自然言語の現象は、すべて数学の公式的な形式論理で扱うことに無理があり、意味解釈・認知活動といった人間の認知理論で扱う必要があるということだろう。今後の課題としては、不足している実証例を増やすこと、より多くの文献に当たること、そしてこの問題を深め確証を得ること、が挙げられる。

9. 教育的示唆

再帰代名詞は、日本人には取っ付きにくく、英語教育の現場でも形式文法の立場から規範的に生徒に教えてしまいがちである。しかし、指示と照応がミスマッチした非文とも思える文が結構使われているのも現実である。本研究で見てきたように、指示照応の問題への理解を深めることは、学生に生きた英語を教えるうえで、学習の奥行きを増し意義のあることだと思われる。

References

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London : Longman.

Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces*. Cambridge, Mass. : The MIT Press.

Hirose, Y. 1997. Hito o Arawasu Kotoba to Shoo-oo (Words of Reference to Persons and Anaphora), *Shiji to Shoo-oo to Hitei* (Reference, Anaphora, and Negation), ed. By Minoru Nakau, 1-89. Tokyo : Kenkyusha.

Huddleston, R. & Pullum, G.K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : CUP.

Kuno, S. (1987). *Functional Syntax*. Chicago : The University of Chicago Press.

Lakoff, G. 1996. Sorry, I'm not myself today : The metaphor system for conceptualizing the self. In Fauconnier, Gilles and Eve Sweetser (eds.), 91-123, *Spaces, Words, and Grammar*. Chicago : University of Chicago Press, pp.91-123.

McCawley, James D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English*. Chicago : The University of Chicago Press.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.

清水眞. 1995. 統語的制約と意味的制約の相互関連 : 英語の再帰代名詞, 人称代名詞と先行詞の例を中心に. 日本認知科学会大会論文集. 12, 52-53.

野島啓一. 1979. 再帰代名詞化・代名詞化と視点. 北九州大学文学部紀要. 22, 37-48.

廣瀬幸夫. 2007. 再帰代名詞の視点的用法と人称の非対称性. 「英語青年」2月号 研究社.

八木克正. 1996. ネイティブの直観にせまる語法研究. 東京 : 研究社.

八木克正. 1999. 英語の文法と語法——意味からのアプローチ. 東京 : 研究社.

その他のデータ

BNC (British National Corpus)

WB (Wordbanks)

Google

LKL (Larry King Lives) の script [2000年1月1日 - 2005年9月3日]